

19. 放射性ヨードによる甲状腺機能亢進症治療成績

吉井 弘文 広田 嘉久 安永 忠正
 福井康太郎 土亀 直俊 仏坂 博正
 金子 輝夫 片山 健志 (熊大・放)

^{131}I 治療において、吸収線量の適正値を求めるため、539 例の ^{131}I 治療患者について、統計的検討を行ない次のような結果を得た。

- 1) 平均すると、年齢 36.7 歳の患者に 6,700 rad 照射 (3.9 mCi) し、5.3 年間の経過観察で、治癒率 71.1% (6,800 rad)、未治癒率 19.4% (6,100 rad)、低下症発生率 9.5% (7,200 rad) であった。
- 2) 服用後 2 年目の治癒例も 20% あった。
- 3) 吸収線量は、6 ないし 7,000 rad が適当と思われる。すなわち、(1) 30 歳を中心として、30 歳未満は 6,000 rad、30 歳以上は 7,000 rad、(2) ^{131}I 摂取率 60% を中心として、60% 未満 6,000 rad、60% 以上は 7,000 rad。
- 4) 投与量が増加しても、治癒率は向上せず、低下症

の発生が増加するだけである。

座長のまとめ (16~19)

中島 彰久

演題 16 は、新しい T_3 および T_4 RIA kit の検討で、抗血清に分離剤を加えたことにより、assay 時間の大幅な短縮と室温で incubate が可能との長所が挙げられたが、測定値のばらつきがやや多い傾向にある。

演題 17 は、従来の放射性ヨードより $^{99\text{m}}\text{Tc}$ への移行を目指し、P.B. Schneider 方式の追試を行なっている。甲状腺機能亢進症群では十分成功しているが、正常群と機能低下群との鑑別にはまだ課題が残る。

演題 18 は、 $^{201}\text{TlCl}$ による経時的な集積像の変化を、正常甲状腺部と病巣部と比較し、悪性と良性疾患の鑑別に一応の成果を示すが、経時的に不変な例も少なくなく、今後の解決を待つ。

演題 19 は、12 年間 739 例に及ぶ甲状腺機能亢進症の ^{131}I 治療の検討であるが、機能低下症の発現を含め、至適線量や治療の適応の決定などに苦労がなされている。